

本日、二中健児の塔慰霊祭にあたりご参列いただいた御遺族、同窓生、那覇高校の生徒教職員と共に健児の塔に祀られた百九十六名の御柱に心より哀悼の誠を捧げます。

戦後八十年、本日、慰霊の日を迎えました。沖縄戦を振り返れば昭和十九年、アメリカ軍の上陸に備え、那覇高校の前身である県立二中の校舎は軍隊の兵舎として使われ、生徒も週の大半を、高射砲の陣地や飛行場の整地、壕掘り作業の勤労働員に駆り出されるようになりました。那覇市の全域が消失する十・十空襲では校舎も炎上、生徒たちはこの城岳（ぐすくだけ）の壕に避難し、その後首里の一中や開南中学の教室を借りて授業を続けていました。昭和二十年、アメリカ軍が上陸する直前の三月十九日、軍の命令で上級生は鉄血勤皇隊を結成、北部の戦場に動員されました。一方、下級生百人余りは通信隊に組み入れられ無線班や暗号班として電報の配達や伝令などを行い宜野湾の嘉数高地や浦添の前田高地での激しい戦闘や追ひ詰められた摩文仁で多くの犠牲者を出しました。

この城岳の丘は当時の二中の生徒が月に一度、朝の集会を開いたり、スポーツに励んだ場所であり、また眼下に見下ろす那覇市内や校舎を眺めながら青春を語り合った思い出の場所でもあります。激しい戦火の中で二中健児達は飢餓と恐怖に耐えながらも学問への情熱を持ち続け、平和な時代が来ることを念じ、そして一日も早く家族のもとへ帰れることを望んでいたかと思うと心痛むばかりであります。

鉄の暴風と言われる空襲や艦砲射撃によって焼き尽くされ県民の四人に一人が犠牲になったあの忌まわしい沖縄戦から八十年。

「ありったけの地獄を集めた」といわれる沖縄戦を生き抜いた当時十四歳から十九歳だった二中健児も、齢九十を超えこの慰霊祭にも出席が叶わなくなっており戦後八十年の歳月の長さを痛感しています

今、世界に目を向けるとイスラエルとイランがミサイルの報復攻撃繰り返し交戦状態に入っている他、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルパレスチナ情勢は混とんとし、連日多くの市民が犠牲になつていきます。

東アジアでも米中ロシアの対立、朝鮮半島の不安定な情勢が続く中、沖縄に置いても台湾有事を想定して先島に自衛隊の新たな配備や強化が進み、住民疎開が具体的に話し合われるなど、今は「戦後ではなくもはや戦前である」と指摘する人もいます。

いかなる理由があれ戦争を許してはなりません。あの悲惨な地上戦を体験し多くの犠牲を強いられてきた沖縄県民は「武力による解決ではなく平和外交と対話を通した問題解決」を強く望み恒久平和を願うばかりであります。

さて、二中・那覇高校は一九一〇年に創立され本年で創立百十五年を迎えました。創立以来、学生・職員・関係者のたゆまぬ努力によって幾多の困難を乗り越えて輝かしい歴史と伝統を築き上げてまいりました。これまでに四万七千人余の卒業生を輩出して、県内外各分野で目覚ましい活躍されていることを二中健児の御霊にご報告いたします。

現在の那覇高校後輩たちも校訓である「和衷協同」「積極進取」のもと文武両道で目覚ましい活躍をしております。ここに眠る二中健児の皆様も後輩たちの活躍ぶりを温かく見守ってください。

我々城岳同窓会も那覇高校のさらなる発展及び後輩たちのために今後とも支援を充実させてまいります。

なお、本日の慰霊祭には沖縄戦の最中、県民保護に尽力された島田叡知事の母校・神戸二中・県立兵庫高校同窓会「武陽会」の役員と荒井警察部長の関係者も兵庫や栃木から遠路ご参列いただいております。心より感謝申し上げます。

結びに、本日、心ならずも参列できなかった二中同窓や遺族の平和を望む思いを共有し、ここに集う私たちが平和を守り

沖縄から世界平和を願う発信の地とすることを二中健児の御霊に誓って追悼の辞といたします。

どうか安らかに眠りください。

令和七年六月二三日

一般社団法人 城岳同窓会

会長 與那覇 博明